

仮設住宅などでのディアコニア報告書

2017年6月20日 Café de FUKUSHIMA 石川和宏

*報告期間:2017年5月24日～6月4日(2017年第5次)(6会場=4仮設 1自治会 1復興住宅)

◇5月24日(水) 生鮮食品等仕入(COSTCO・ハナマサ) 横浜発 荷物搬入

◇5月25日(木) 荷物整理 仕込み

【1】5月26日 飯舘自治会(8回目)(原町区 飯舘村民)

全村避難の飯舘村民で、南相馬市に避難し、みなし仮設などに住んでおられる方々の自治会。アパート・借家などに避難している飯舘村民は、400名ほどいる。飯舘村は、大部分が今年3月末に避難指示解除になった。

隔月の開催を依頼されていて、3月に続き8回目。会場は、原町区の生涯学習センター。

奉仕者は、石川和宏

支援の結果

- ・支援者を除く参加者23名(内男性4名) 総参加者26名
- ・提供したのは、DVD(きみまる6巻前半・コロケ後半・5代目円楽が回答者時代の笑点)・飯舘村ニュース・豚汁昼食・カフェ(コーヒーとケーキ)
- ・皆さん開始1時間以上前から三々五々会場にお出でになり、話しに花が咲いていた。
- ・次回から、皆さんの談笑の時間を多くするために、開催曜日を金から木に代えることにした。金曜日は、午後から会場を使う他の使用者がいるので、終わりが慌ただしいため。私たちが話を聞くよりも、飯舘村からの避難者相互のお話しが貴重である。

皆さんからお聞きしたこと

- ・飯舘村には長泥区(帰還困難区域で除染は行われていない)を除いて、フレコンバックが230万個ある。中間貯蔵施設(双葉町)へ運び出すのが年間27,000袋で、全部なくなるまで100年掛かる。
- ・飯舘村の小学校(*)は、4月の新入学生が2人だった。
 - *避難先の川俣町にある3小学校合同の仮設校舎。来年度は飯舘村に移転する。全校生徒が51人で、昨年度に比べ半減した。
- ・来月には、自治会で自殺防止の話しを聞く。
- ・ここで食べるご飯は美味しい。
- ・今日は、言ちゃん(腹話術の人形)がいなくて寂しかった。次回会えるのを楽しみにしている。



【2】5月27日 西町復興住宅(2回目)(相馬市民)

南相馬市は、津波後に新たな区画整理をした。西町復興住宅は、住宅を再建できない地域住民に割り当てられた復興住宅で、2年前に完成した。鹿島区の方が多いが原町区の方もいる。昨年11月以来2回目の訪問。3階建てのアパートで戸数が30戸、南相馬市の鹿島区役所の直ぐ近くの市街地にある。

ここで住民のサロンの責任者をしておられる桑折さんの招請を受けて訪問し、イベントを開催した。

奉仕者は石川和宏

支援の結果

- ・提供したのは、DVD(綾小路きみまろライブ第3集)・昼食(豚汁)・カフェ(コーヒーとケーキ)・ビンゴゲーム
- ・支援者を除く参加者12名(内男性5名) 総参加者13名 庖丁研ぎ6世帯10本

皆さんからお聞きしたこと

《原発事故・津波・地震について》

- ・津波で高台に避難した。そこから家が流されるのを見た。大きな波が家の上に落ちた。全てが流された。アルバムだけ後で見つけた。
- ・区画整理があり、元の場所に家を建てることは出来ない。
- ・70戸あった部落が、全てなくなった。
- ・被災後は借り上げ住宅に住んでいたので、支援は何も受けられなかった。4年間そうだった。行政からの連絡もなかった。仮設住宅は、申し込んだが当たらなかった。
- ・津波でなく原発被災の人はいろいろ支援があっている。
- ・一時家族の元に避難したが、そう長くは居られなかった。
- ・被災地は復興需要があると言われているが、地元の消化能力には限りがある。儲かっているのは県外の業者だ。それもやがてはなくなる。(内装の仕事をしている方)

《今後の暮らしについて》

- ・農業をしていたが、農機具一式から揃え直さなければならない。再開は難しい。

《復興住宅について》

- ・既に家賃は発生している。入居世帯の収入が増えると家賃が上がるので、子どもと同居がしづらい。昔は大家族で助け合って生きてきたのだが。

【3】5月29日 安達運動場仮設住宅(3回目)(二本松市 浪江町民)

二本松市郊外の大規模運動施設内にある。全員が浪江町からの避難者。建設戸数244戸で、浪江町の仮設住宅としては最大。現在住んでおられるのは80世帯ほど。2015年11月に続き2回目の訪問。

浪江町役場生活支援課の仲介 浪江町は、大部分が今年3月末に避難指示解除になった。

敷地を返還するために、今年9月に退居しなければならないと聞いた。今回が最後の訪問(支援)となるかも知れない。

近くに復興住宅(*)があり、そこから10人位の参加者があった。ロコミによる。



*石倉復興住宅(167戸)。仮設の方はこの復興住宅を「下(した)」と呼んでいた。

この仮設には、福島大学の学生による「いだけ支援」があり、そこの学生さんに手伝ってもらった。

奉仕者は、石川和宏 石川千鶴子

支援の結果

- ・提供したのは、腹話術・DVD(綾小路きみまろライブ第3集)・昼食(豚汁)・カフェ(コーヒーとケーキ)・ビンゴゲーム
- ・支援者を除く参加者 27名(内男性6名) 総参加者 31名 庖丁 研ぎ 11 世帯 12 本



皆さんからお聞きしたこと

《原発事故・津波・地震について》

- ・最初に避難したときは、114号線が大渋滞した。「年寄りには危ない」と言われ、裏道から原町方向に向かった。
- ・夫は牛馬専門の獣医だった。原発事故でほとんどが殺処分されたので、仕事を失った。今は酸素吸入が必要になった。浪江の家を直したら帰る予定だ。
- ・請戸に家があるが、津島を迂回しないと行けない(*)ので時間が掛かる。

*二本松ー請戸の最短距離は114号線を通るルート。途中で27kmにわたって帰還困難区域があり通行止めになっている。



《復興住宅について》

- ・復興住宅は、県内被災市町村民ごちゃ混ぜでなく、市町村毎に分けて建てれば、住民の交流が進むはず。
- ・石倉復興住宅は立地が悪く、入居者を再々募集している。

《帰還について》

- ・勤務先で家を立てている。浪江には戻らない。
- ・仮設を出ていわき市などの復興住宅に移る人が多い。



【4】5月30日 松川第2仮設住宅(3回目)(松川町 飯館村民)

飯館村から福島市松川町の仮設に避難している原発被災者の方々が住む。全員が飯館村民。

JR松川駅に近い工業団地の中にある。前回訪問は2016年8月。109戸建設で居住者は、45世帯。

飯館村の大部分は、今年3月末に避難指示が解除されている。

奉仕者は、石川和宏 石川千鶴子

及川寿美子さん(宮城県・神職)が、東北ヘルプ(川上事務局長)の紹介で実習に来られ、手伝って頂いた。

及川さんには、「聞き役」をお願いした。

飯館村役場の広報担当木幡貴彦氏が、カメラマンと共に取材に来られた。(木幡氏の前職は保育士)

敷地内に線量計があり、0.112 μ Sv/Hを表示していた。年間被曝量は約 1mSv。



支援の結果

- ・提供したのは、腹話術・DVD(綾小路きみまろライブ第5集)・昼食(豚汁)・カフェ(コーヒーとケーキ)・ビンゴゲーム
- ・支援者を除く参加者 15 名(内男性 4 名) 総参加者 20 名 庖丁研ぎ 2 世帯 2 本

皆さんからお聞きしたこと

《原発事故・津波・地震について》

- ・養鶏業をしていた。出荷が出来ず 15,000 羽を殺した同業者もいる。私は大丈夫だった。
- ・全ての動植物が放射能の被害を受けた。100 年単位で育った大きな木も、除染のために切られてしまった。
- ・飯舘村は、地震の影響がなかった。瓦一枚落ちていない。
- ・事故と補償金でみんなの人生の価値観が変わってしまった。
- ・小さい子供たちや、村から巣立った人達も、今は家に帰れない。帰る故郷を奪われた。



《仮設住宅の暮らしについて》

- ・飼い犬に餌を与えるために 5 年間毎日飯舘村に通った。福島市に家を建てて連れて帰った。
- ・村では 9 人家族だった。今は仮設に一人で住んでいる。
- ・7 ヶ月の孫がいた。今は小学生。もう私のことは忘れたろう。

《帰還について》

- ・大工をしていた。道具は錆びてしまった。帰らない。息子の所で住む。
- ・避難指示が解除され、私たちは「帰れるのに帰らない人」になってしまった。
- ・村には帰らない。



《帰還後の暮らしについて》

- ・鶏舎がメチャクチャになっているので、戻って養鶏業を再開するのは無理だ。

《今後の暮らしについて》

- ・私たちは大家族なので、家は大きい。4 畳半とか 6 畳間はない。最低でも 8 畳間だ。村外で、同じ規模の家を建てると「原発御殿」と陰口される。
- ・補償金をもらって、かつての生活が一変したけれど、以前のような幸福感は全くない。



【5】6月1日 旧中郷小仮設住宅（3回目）（三春町 葛尾村民）

田村郡三春町に避難している福島県双葉郡葛尾村の原発被災者の方々の仮設住宅で、現在居住しているのは十数世帯。昨年5月に続き3回目の訪問。村の大部分は昨年6月に避難指示が解除されている。三春町の山間にあるが、郡山駅からは車で30分と、近い。サマリタンハウスからは130kmあり2時間掛かる。奉仕者は、遠藤茂雄さん 遠藤清子さん（大和カルバリチャペル） 石川和宏 石川千鶴子

支援の結果

提供したのは、腹話術・DVD（綾小路きみまろライブ第5集）・昼食（豚汁）・カフェ（コーヒーとケーキ）・ビンゴゲーム。

遠藤清子さんは、参加者ほぼ全員に「アロマセラピー」をして下さり、皆さんに喜んで頂いた。

遠藤茂雄さんは庖丁研ぎも引き受けて下さった。

皆さんが1時間以上前から集まってこられたので、PPAPや懐かしい歌を映像付きでご覧頂いた。

支援者を除く参加者18名（内男性6名） 総参加者22名 庖丁研ぎ 5世帯5本

近くにある復興住宅の方が3名参加した。また、葛尾村に戻った方も参加した。車で1時間掛かったとのこと。

皆さんからお聞きしたこと

《除染について》

- ・居住地は、山から先に除染しないと、風や雨でまた線量が上がる。
- ・原発からの放射能汚染は、事故前からあった。知らされなかっただけだ。
- ・野行地区の焼却炉（*）で汚染物資を燃やすが、平成30年では終わらないだろう。
*野行地区は葛尾村唯一の帰還困難区域で、焼却炉とは、仮設焼却施設（減容化処理）のこと。2015年4月稼働。建設・解体費用371億円。一日200トン焼却し、焼却予定量は129,000トンなので、645日で終わることになる。「焼却そのものの稼働は2年間程度」なので、計画では間もなく終わる。

《仮設住宅の暮らしについて》

- ・仮設は、来年3月までは、ある。
- ・村では野菜を作っていたが、ここでは買う。固いし味がない。

《復興住宅の暮らしについて》

- ・仮設住宅は部落毎に住んでいたが、復興住宅はごちゃ混ぜ。住民同士の交流はない。
- ・イベントは、ない。

《帰還について》

- ・村で農業をしていた。7年経って年も取った。もう遅い。（間もなく93歳になられる方）
- ・村に残って牛に餌をやっている人がいた。夜は、戻っていることが分からないように電気を消して暮らしてい



た。

《帰還後の暮らしについて》

- ・34世帯の部落で、村に帰ったのは4世帯。
- ・畑は除染(表土を削る)して上に山の土を被せてある。堆肥と枯葉を混ぜて土を作り、家族が食べる野菜を育てている。大規模に作って線量がパスしても、葛尾産の作物は売れないだろう。
- ・新聞配達は、パトロールの人がしてくれる。
- ・病院は、三春町まで来る。
- ・イノシシやカラスが人を見ても逃げない。人を怖がらない。

《イベントについて》

- ・ボランティアは来ない。たとえ来ても参加者が少なく、気の毒だ。
- ・村では、こういうのはない。



【6】6月2日 貝山仮設住宅(3回目)(三春町 葛尾村民)

福島県双葉郡葛尾村(昨年6月まで全村避難)の原発被災者の方々の仮設住宅で、現在居住しているのは十数世帯。昨年10月に続き3回目の訪問。

三春町の葛尾村三春出張所と同じ敷地にある。

奉仕者は、遠藤茂雄さん 遠藤清子さん(大和カルバリチャペル) 石川和宏 石川千鶴子

支援の結果

提供したのは、腹話術・DVD(綾小路きみまろライブ第5集)・昼食(豚汁)・カフェ(コーヒーとケーキ)・ビンゴゲーム・アロマセラピー・庖丁研ぎ。

支援者を除く参加者26名(内男性5名) 総参加者30名 庖丁研ぎ7世帯7本

イベントに来たいけれど健康の具合で来られない人、来ようと思えば来られるが引き籠もっている人などに管理人さんが豚汁とご飯を届けておられた。10名くらい。こういう思いやりが被災者・避難者を陰で支えている。そこまでは管理人としての仕事ではないのに、頭が下がる。

皆さんからお聞きしたこと

《原発事故・津波・地震について》

- ・村では、孫や姑など10人家族で暮らしていた。今はみんなバラバラになってしまった。
- ・村では、葉タバコ栽培と農業をしていた。黒毛の牛も飼っていた。原発事故の時は姑の介護をしていた。避難時は車で病院に運んだ。あづま運動公園(体育館)で生活した。3000人くらいいた。みんなはそこから会津に逃げたが、病院通いがあるので体育館に居た。そこから仮設に移った。



・おにぎり一個と牛乳をもらうのに2時間半並んだ。

《帰還について》

- ・葛尾村で家を建ててるが、大工さんの順番待ち。
- ・家は建てたのだが、息子がこっちで仕事をしているので、引っ越ししていない。
- ・夫が村のパトロールをしているので村に帰っているが、戻る場所ではない。医者も買い物も村では出来ない。
- ・この仮設で村に帰る人は2割くらいだと思う。

《イベントで聞いたその他のこと》

- ・ご飯は炊いたことがない。(ビンゴゲームの賞品選びで、レトルトの「五目釜飯」を選んだ方)
- ・復興住宅に移った人も呼びたかった。呼べば来ると思うけど、車がないので来られなかった。



【8】まとめ

出会った方々 121名(内男性30名) 総参加者 142名 庖丁研ぎ 31世帯 36本

今回も5ヶ所でビンゴゲームをしました。皆さんに「プラスの刺激」を楽しんで頂きました。

改革派中部中会の皆さまから手作りクッキーを頂き、これも被災者の皆さんに喜んでもらえました。

市町村によって異なる避難者支援

被災地を巡っていると、市町村毎で原発事故に対する思いがかなり違うと感じる。原発爆発後真っ先に避難した葛尾村民は、相対的にソフトな受け止めをしている。

また、これとは別に、仮設住宅住民の置かれている状況を見ると、避難民に対する行政の支援も差が大きい。例えば、飯舘村は、避難指示が最も遅れたが、みなし仮設などで孤立している避難者を「未だに」支援している。「自殺防止の話」をするというのも、村が村民の状況を把握し手を打っていることの表れである。

戻らない避難者・戻れない避難者

被災地では、「戻らない避難者」・「戻れない避難者」が、圧倒的多数です。本文中にあるように、理由はそれぞれです。仮設住宅の入居期限は来年3月に迫っています。

東京電力福島第1原子力発電所事故による避難指示が帰還困難区域を除き解除された福島県葛尾村で、帰還者数が今月1日現在で147人とどまることが、同村への取材で分かった。12日で避難指示解除から1年が過ぎたが、帰還者の割合は約1割にとどまる。農業を再開したのは稲作で14戸、畜産で4戸。全ての避難指示が解除され、14日で1年を迎えた川内村でも、今月1日現在で自宅に戻ったのは61人とどまった(川内村調べ)。約240人が村外に避難し、住民帰還の割合は約2割にとどまっている。(日本経済新聞2017.06.15)

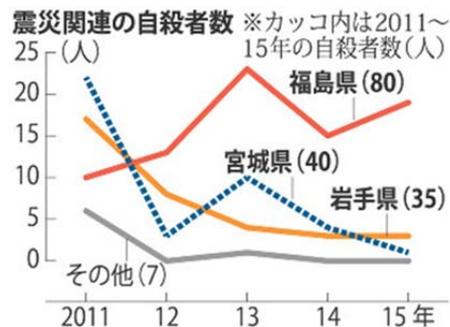


自殺・孤独死

「被災者支援、3年で4億円減額 精神科病床が激減 関連自殺、福島突出80人」「原発事故の影響で福島県沿岸部の相双地区の精神科病院は五つから二つに減り、約900床あった病床数も約110床まで激減」(毎日新聞 2017.03.01 グラフを含む)

「被災者は支援の終わりを恐れ、高い自殺リスクにさらされている。」(河北新報 02017.05.26)

阪神・淡路大震災(1995年)の災害復興公営住宅では、昨年1年間に確認された「孤独死」が65人(前年比32人増)でした(朝日新聞 2017.01.13)。



福島県内でもこれから先何十年も同じことが起こるのでしょうか。

同情と共生

このような立場におられる避難者の方々に、「同情と共生(支援)」をしなければなりません。また、その支援は、「仮設を出たが故郷には戻らない避難者」にも及ばなければなりません。復興住宅(福島県の場合は、「原子力災害による避難者のための復興公営住宅」)が、その一つです。6月以降復興住宅支援にも注力したいと計画しています。その様子は次号以降でお伝えします。

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。(ローマ 12:15)

【9】今後のスケジュール

◇6月22日～7月1日

- 6月24日(土) 牛河内第2・第3・第4仮設住宅(合同)(4回目)(南相馬市・小高区民)
- 6月26日(月) 寺内塚合第2仮設住宅(7回目)(南相馬市・小高区民)
- 6月27日(火) 北原復興住宅団地(初回)(南相馬市・福島県民)
- 6月28日(水) 上町復興住宅団地(初回)(南相馬市・福島県民)
- 6月30日(金) 壁沢復興住宅団地(初回)(川俣町・福島県民)

◇7月26日～8月5日

- 7月27日(木) 飯舘自治会(9回目)(原町区 飯舘村民) 会場:石神生涯学習センター
- 7月28日(金) 伊達東仮設住宅(4回目)(伊達市・飯舘村民)
- 7月31日(月) 川内村(初回)(川内村・川内村民)
- 8月1日(火) 西町復興住宅(初回)(南相馬市・福島県民)
- 8月3日(木) 根柄山復興住宅(初回)(二本松市・福島県民)
- 8月4日(金) 南町復興住宅(初回)(南相馬市・福島県民)

◇8月23日～9月2日

◇9月20日～9月30日

◇10月18日～10月28日